

掌編小説

あそびの心理学

片岡 弘

子どもは遊ばなければならぬのです

—クループスカヤ—

S教授の幼児心理学のレクチャーは、いつも豊富な具体的事例に裏打ちされているので、七面倒な理論も実にわかりやすいと学生間での評判は高かった。

大学の四階にある講義室の窓からはちょうど満開の桜の木立と、その枝越しに正門の門扉が見えた。門の外のほかにも車の行き来が激しい通りを左に目で追うと、芽吹き始めたイチヨウ並木の梢を通してひととき目立つ赤い屋根の保育園が垣間見えた。大通りから保育園の敷地に沿って入る脇道は大学のキャンパスから電車の駅に通じる近道で、朝夕は多くの学生がフェンスの

金網越しに園庭で遊ぶ幼児たちを眺めながらこの道を通った。そんなとき、フェンスの内側によじ登って学生たちに話しかける子どももいたから、けっこう顔見知りになったりして、金網越しにしばらくその子たちのお相手をしてやる学生もいた。考えてみると今の時代、小学生の頃はともかく中学、高校とお互い鼻面を並べて競い合うような生活を強いられてきた学生たちである。ようやく大学の門にたどり着いた今、屈託もなく本性丸出しで振舞う園児たちの姿がことさらに彼らのノスタルジアをくすぐったとしてもおかしくはない。たとい行きずりにはあっても、子どもたちと交流することが彼らにとっては得がたい心の癒し方なのかもしれない。

S教授はさすがにそのところを知り抜いている。彼は、引用する事例に学生たちが身近に感じている子どもたち、つまりこのつくし保育園の園児たちを頻繁に登場させた。

——つくし保育園の木元さんという保育士さんから先日お聞きした話ですけれども……教授のレクチャーはいつもこんな前置きから始まる。実は木元さんという保育士が実在するのかどうかはきわめて怪しいのだが、それはこの際問題ではなかった。学生たちもその辺はちゃんと心得ている。が、このように話し出されると、それがいかにも現実味を帯びた話として聞こえてくるから不思議であった。

——タクミちゃんとダイキちゃんという二人の四歳児がお砂場で遊んでいたそうです。砂のお山を作ってトンネルを掘って、その辺から拾ってきた……ほら、あるでしょう「ボス」とかなんとかいう缶コーヒーが……ああいう空き缶を多分Sに見立ててでしょう、「シュツシュツ、ポツポ。シュツシュツ、ポツポ」って。と、そこへ二人よりもちよつと年長のヨシブミくんがやって来たのですな。そして「何だ、空き缶じゃないか」「詰まんない」「ちつともおもしろくないじゃん」とか、

さかんにケチをつけ始めたのですよ。タクミちゃんとダイキちゃんの方はといえば、そんなことごとく吹く風で顔でS.L遊びをつづけていたそうです。ところがですな、木元さんが他の子どものところへ行って、それも五分も経たないくらいで戻ってみると、なんとヨシブミくんも一緒にあって、楽しそうにS.L遊びに興じていたのですよ。いったい何があったのだと思いますか……。

S教授はそこで一息つくと、反応をたしかめるかのように学生たちの顔をひとわたり見渡した。

学生たちは、むかし自分も保育園か幼稚園に通ったという憶えはあるが、そこでどんな風に過ごしたかについてはほとんど記憶していない。けれども、まことしやかにタクミちゃん、ダイキちゃん、ヨシブミくんなどと固有名詞を挙げられると、彼らの頭のなかでは、それらが毎朝見かける園児の誰彼の顔と何となく結びつくし、遠いむかしの自分自身もたしかにそうであったようにも思えて来て、子どもたちの遊びの様子がよりリアルに想起されてくるのであった。だからつい引き込まれて、ヨシブミくんという子の行為の謎について真剣に考えてしまう。S教授はそんな事例を、まず

いくつか挙げて」どうです、面白いでしょう」と学生たち
ちに言う。

「面白いでしょう」と駄目押しされても、面白さの対
象が何であるのか咄嗟には判断しかねて戸惑いをみせ
る学生もいたが、教授はあえてそれは無視して話をつ
づけた。

——よく、子どもは遊びを通じて自立心や協調性、お
互いの思いやりなどを学ぶ……といわれるでしょう。
まあ、確かに結果としてそういうことはありますな。
しかしここで問題にしたいのは、「あそび」というもの
が子どもの精神発達にとつてどういう意味を持つてい
るかということなのですよ……。

いよいよ本論に入るわけだが、残念ながら九十分の
教授の講義を再現する紙面の余裕はない。したがって、
どうしても詳細を知りたいという方には後日録音テー
プをお貸しすることにして、ここではこの日のレクチャー
のまとめとして教授が最後に述べた言葉だけを記して
おく。

——……最初に述べたいいくつかの事例でわかるように、
ひとつは、ある一定の（暗黙の）約束事＝ルールがな
ければ「遊び」は成立しないのであって、その「あそび」
のなかでルールに拘束されることに意味があり、子ども

もはそれが楽しいのです。それからもうひとつ大事な
ことは、「あそび」の世界という想像上の状況を作り
出すことで、子どもは表象を駆使することを学んでも
いるのですね。その意味で、三歳くらいから就学前の
子どもの「あそび」つまり役割あそび、ゴッコあそびと
いうのはこの時期の子どもの思考の発達を主導する活
動だといえるのです。それは就学後の子どもがことば
や記号を使って学習することに匹敵するほどだといわ
れています。ですから、早期教育もけっこうですけれ
ども、その前にまず、子どもは自由な「あそび」を保
障されなければなりません。

それにしても、今の学生たちはどんな「あそび」を経
験して育ってきたのだろうか、一度調査してみる必要
があるなど教授は思っている。実は彼にも学生たちと
同年代の息子と娘がいる。しかし今にして思えばきわ
めて迂闊だったというしかないのだが、子育てはすべ
て妻まかせだったから、自分自身の子どもが幼児期に
どのような生育過程をたどったかを、記録していなかつ
たのである。がむしやらに文献を漁り、院生たちと討
論し、幼稚園や保育園で調査や実験もしてそれなりの
論文を学内誌などに発表してはきた。だが、当時は

「研究」という言葉の魔力に取り憑かれて家庭をあまり顧みなかったから、現実の生活の中で自分の子どもがどのように育っているかには目を背けて過ごしてしまつたといつてよい。ただ、幸いなことに妻が記した育児日記—とはいつても女性雑誌の小さな付録だつたようでごく大まかにしか書かれてはいないのだが—が残っていた。またその折々に撮つた子どものスナップ写真がある。写真を見、日記を読むと、それでも擦れてしまつた記憶の底からいくつかの断片をよみがえらせることはできた。

たとえば、二歳半くらいだろうか、息子の写真がある。横長の木製の積み木が床に長く連ねて並べられ、教授愛好のショートピースの空き箱が三個連結されて載っている。身をよじるように伏せ、床すれすれに頬を寄せた息子が、実に真剣な表情で濃いブルーの空き箱に視線を送っている。間違いなく教授が撮影した一枚だ。ただしその時に、息子の「あそび」の意味をそんなに深く考えていたとは思われない。単なる被写体として、澄んだ瞳をこの上なくかわいいと感じただけだつたに相違ない。ところが、妻の育児日記には次のような記述が残っていた。

——五月十七日／＼このところ連日「デンチャ(電車)

見にいこ」と言つてせがむ。午前中は洗濯やら何やらで手が離せないから何とかなだめてはいるが、午後お昼寝から覚めるともうなだめきれない。お夕飯の買出しを早めることにして連れて出る。小田急の駅のホームが見える道路端が彼のお目当ての場所。柵のところにしゃがみ込んで、入ってくる電車出ていく電車を、目を皿のようにして飽きもしないで眺めている。すぐ前で汽笛でも鳴ろうものなら、もう興奮して「デンチャ、デンチャ」と体を揺すつて叫ぶ。帰り道、「カターン、カターン……」と電車が走り出すときの音をまねて上機嫌である——

その日もたぶん、息子は家に帰るとすぐに空き箱の電車あそびに熱中しただろう。妻がその電車あそびの意味を考えて、ことさらに意識してこの日記を書いたとは思えない。しかし今やこの日記と写真のコンビは、教授のあそびの心理学の推論を裏付ける貴重なデータのひとつになった。

「容易には実現し難いような欲望が子どものなかに成熟しなかつたら、あそびは存在しなかつただろう」と言つたのはたしかヴィゴツキーであった。次回にはこの事例も使おうと教授は思つている。

(かたおか ひろし) 研究所々員、日本民主主義文学会々員